



HAL
open science

日仏対照研究「目的語」の省略
Hisae Akihiro, Yayoi Nakamura-Delloye

► **To cite this version:**

Hisae Akihiro, Yayoi Nakamura-Delloye. 日仏対照研究「目的語」の省略. 12ème colloque sur l'enseignement du japonais, 2011, Bordeaux, France. <hal-04745493>

HAL Id: hal-04745493

<https://hal.science/hal-04745493v1>

Submitted on 20 Oct 2024

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire HAL, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

日仏対照研究「目的語」の省略

日本語教育への応用

秋廣尚恵・中村弥生

プロバンス大学・国立情報学自動制御研究所

目的語・ヲ格・省略・適応語・照応的目的語省略・非照応的目的語省略

1. はじめに

本論文では、目的語の省略に関する日仏語対照研究の一例とその日本語教育への応用を提案する。まずはじめに日本語における省略、特に目的語の省略を概観した後、目的語省略に関する一般言語学研究を参照しながら照応的省略と非照応的省略について定義する。次に、フランス語、日本語におけるこれらの省略を検証し、これらの省略が日本語教育の現場にどのような影響を与えているのかということ学習者データの分析をとおして見て行く。そして最後に、これらの現象の日仏語間における相違が日本語学習時にあたえる影響に対し、どのように対応していくかということに関しての提案を行う。

2. 日本語における省略

日本語における省略は、益岡・田窪（1992）の文法書などでもいわれているように「文脈から予測できたり、一度話題になった要素は省略されることが多い。省略される要素は、主語、補足語、述語、助詞、主節、等、非常に多岐にわたる。」と考えられている。

- 1) 鯨は魚ではない。ほ乳類だ。 (主題の省略)
- 2) あの本を読んだ？ (現場要素主題の省略)
- 3) 「きのう田中さんに会いましたか。」
「はい、会いました。」 (補足語の省略)
- 4) ご飯、食べた？ (助詞の省略)
- 5) これ、いくらですか。 (助詞の省略)
- 6) 君も行けばいいのに。 (主節の省略)
- 7) 「この家は高いだろうね。」
「だろうね。」 (ムードの表現のみを残し、他の要素すべて省略)

これら様々な省略の中でも、今日は特に目的語に関する省略に注目していきたい。

3. 日本語における目的語省略

ここでは、寺村（1982）、仁田他（2009）などの文法書でも広く用いられているとおり、目的語を「他動詞が要求する補語の中で働きかける対象を表すもの、特にヲ格成分」と定義しておく。次に示す例文では、下線の述語に対する目的語が省略されている。

8) 「もうあの映画を見ましたか。」

「はい、見ました。」

9) 「ここにあったケーキは？」

「ごめん、食べた。」

10) 「うちの息子、最近、本当によく食べるのよ。この前なんかね…」

しかしながら、一口に目的語の省略といっても、すべてが同じ性質のものではない。例文 8、9 では、それぞれ「映画」「ケーキ」という、すでにこの文の発話以前に談話に導入されている要素が省略されている。これに対し、例文 10 では「食べる」という述語に対し目的語の機能をはたす要素が文脈にあらわれていない。これは、紙面の都合で記されていないというのではなく、この文は前置き無しに発話されうるという特徴がある。この「前置き無し」というのが、田窪（1989）が「談話の初期状態」と名付けたものである。田窪はこれを「言語的導入無しで言及できる対象の集合とその対象の持つ属性や対象間の関係からなる」と定義している。例文 8、9 の目的語が省略された文「はい、見ました。」「ごめん、食べた。」は、この談話の初期状態で発話されることはない。これらの例文から目的語の省略という現象にも違った性質のものが混在していることが分かる。

では、これらの現象が日本語独自のものなのかということをも明らかにするために、次の段落では一般言語学研究に話を移して行きたい。

4. 一般言語学における先行研究

「省略」という現象は、実は様々な言語において広く観察される一般的な現象である。これまで多くの言語学者によって研究されてきたが、一般言語学的視点に立った先行研究として次の2つを挙げたい。

4.1. Harris の「適応語」の考え方

Harris(1970) は「省略」を一種の変形操作として考え「ゼロ化 (zeroing)」と名づけている。Harris によれば「ゼロ化」とはコンテキストから再現可能性が高い語を音声

的に消去することである。Harris は消去はされてもゼロ化された要素は常に文中の他の要素との関係を保ち続けていると考える。

“ The zeroing of redundant materiel [...] drops words from a sentence, but only words whose presence can be reconstructed from the environment. Hence we can say that the materiel is still morphologically present, that only its phonemes becomes zero, and that the language therefore has no dropping of morphemes”

Harris (1970) p.558

Harris によればゼロ化されやすい語のタイプには、繰り返しの語(例文 11) 、不定語(例文 12) 、適応語(例文 13) の 3 つがあるという。

11) He denied his having slept.

12) He read things all day.

13) I began ~~to read~~ the book.

このうち、適応語についてはあまりなじみのない概念であると思われるので Harris の定義を引用しておく、

X ap [...] is a particular member of category X which in the given culture or subject matter (e.g. conversation or science) is accepted (understood) as the main word to occur with the particular other words of that K or insert or operator, or with the particular word to which the K or insert is adjoined. In a form Ai Xap Bi, the Xap means not full dictionary meaning but that which primary carries out the X-relation (e.g. verb-relation) of Ai to Bi (in the present discourse). Several words of category X may equally satisfy Ai Xap Bi ; they are then locally synonymous in respect to Ai...Bi.

Harris, Z.S. (1970) p.559

つまり、適応語とは「与えられた文化的コンテクストあるいは発話状況の中で、ある語と共起する頻度の最も高い語のカテゴリーに属する語」であると言える

4.2. 目的語省略の 2 つのタイプと言語類型論

一方、Lemaréchal (1991) Creisseils (2006) は言語類型学的な観点からとても興味深い指摘がしている。彼らによれば、目的語省略には大きく分けて 2 つのタイプがある。一つは照応的なもの、すなわち談話の中で、あるいは発話現場の中に既に現れている、あるいは明らかになっている要素との照応関係、現場指示関係から何が省略されているかが分かるものである。もう一つは、照応関係によってではなく、与えられた文化的、あるいは談話的なコンテクストの中で用いられる動詞の意味や用法から何が省略

されているか分かるものである。本稿ではこの2つのタイプをそれぞれ、「照応的目的語省略」「非照応的目的語省略」と呼んでおく。Lemaréchal (1991) や Creissels (2006) では、言語の中に、「照応的目的語省略」しか持たない言語があるという。そのような言語では、「非照応的目的語」が存在しないかわりに上位概念を表す名詞句や適応語、あるいは不定代名詞句によって目的語を明示する必要があるという。Creissels (2006) によると、アフリカのコートジボワールの少数言語であるバルエ語では、目的語を省略して、

14) Kofi di-li

コフィ 食べる一過去

たとえば、「コフィは(それを)食べた」という照応的目的語省略の文になる。この言語には非照応的目的語省略の文は存在しない。その代わりに、食べ物一般を表す「alie」という語によって目的語を明示しなくてはならない。

15) Kofi di-li alie

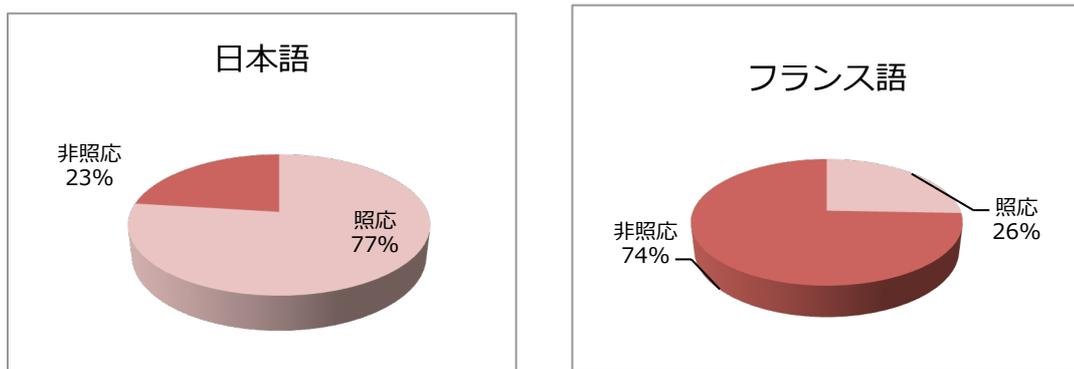
コフィ 食べる一過去 食べ物一般

このような言語の例としては、中国語や白モン語（東南アジアの少数言語の一つ）があるという。

5. 会話コーパスに見る日本語とフランス語の違い

この照応的目的語省略と非照応的目的語の区分がフランス語と日本語ではどのようになされているのかという点が気になり、会話コーパスを用い、両言語で統計を取ってみた。今回利用したのは、日本語については「BTSによる多言語話し言葉コーパス（東京外国語大学2005年作成）」、フランス語については「Corpaix（プロバンス大学フランス語学科所有のコーパス）」である。各言語およそ700例以上の省略の例を対照に、それが「照応的」か「非照応的」かというタイプ分けをした。

表1：日仏における照応的省略と非照応的省略の割合



日本語とフランス語はいずれも「照応的省略」「非照応的省略」の両方を持つ言語であるが、統計の結果を見てみると、その配分は日本語とフランス語で完全に逆転していることが興味深い。日本語では照応的な目的語省略への強い志向が見られるのに対し、フランス語では非照応的な目的語への強い志向があると考えられる。

6. フランス語における目的語省略

ここで、細かく両言語における目的語省略の条件（統語的、語彙的、文脈的）を見てみることにしよう。まずは、フランス語について見てみる。

6.1. フランス語の照応的省略

照応的省略をめぐって日本語との違いを一言で言えば、フランス語では統語的、語彙的な制約が強いということである。照応的名詞句の多くが代名詞化されるということを考えても省略されるのはごく一部の名詞句に限られる。

まず、Hopper&Thompson (1980)で定義される「個別性の低い名詞句」が省略される傾向がある。フランス語には、「個別性の高い名詞句」は逆に代名詞化されなければならないという統語的制約がある。

16) Est-ce que tu aimes ce garçon? Oui, je l'aime bien.

(ある特定の男の子：個別性が高い)

17) Est-ce que tu aimes Rodin. Non, je n'aime pas.

(ロダン (の作品)：個別性が低い)

ついで、「適応語」は省略されるが、そうでないものは省略されない。つまり、使用コンテキスト、および共起する要素から見て、語彙的予測可能性の高い名詞句がもっぱら省略される。逆に予測可能性が低い名詞句は代名詞化されなければならない。動詞 *allumer* では、適応語として考えられる「明かり」「煙草、ライターなど」は省略されることがあっても、そうでないもの、例えば「電化製品」などは省略されにくい。

18) Dans la cuisine le père allume son briquet – Non, dit la maman, n'allume pas.

19) l'ordinateur, tu l'allumes, le pointeur programme va se mettre à un certain endroit,

quand on l'allume bon de manière donc électronique. (Corpaix)

また、同じ動詞と目的語の組み合わせが非常に近い文脈内で繰り返される場合には省略される。よくあるのが「質問に対する答え」の場合であるが、次のような例でも省略がおきやすい。

20) Téléphone d'abord, moi je te commande un café

Jamais je ne boirai, moi, je veux dormir.

Je commande quand même. (Frantext)

6.2. フランス語の非照応的省略

第一に、AKIHIRO (2004)でも記したように、一部の動詞用法に制約はあるものの、それを除けば、かなりの動詞において非照応が可能である。

また、省略が起きやすいのは、照応的省略の時と同様に「適応語」の場合である。

21) Il parle peu quand il conduit. (Corpaix)

22) Il a marqué dès la première minute. (Corpaix)

さらに、構文のタイプについて見てみると、いくつかの動詞が列挙・対比される文や習慣文・属性説明文でとりわけ省略がおきやすい。

23) Je donne facilement, je ne prête jamais. (Frantext)

24) Elle était illettrée – elle ne savait pas lire ni écrire. (Corpaix)

7. 日本語の目的語省略

7.1. 日本語における照応的省略

日本語では「文脈から予測できたり、一度話題になった要素は省略されることが多い」(益岡・田窪 1992)ということが一大原則になっており、かなり広く照応的省略が行われる。

また、主題という要素が構文上で重要な位置を占める日本語においては、主題化による目的語の省略も多く見られる。

25) 家賃は、きのう 払った。

この文では、「家賃」という要素が主題化されており目的語が表層に現れていない。これは、「家賃」という要素が主題であると同時に目的語の機能も果たしているからであり、後出の目的語の位置では省略されたと考えられる。三上(1953)はこのような主題がはたす構文機能を主題の兼務と呼ぶが、日本語ではこの主題の兼務により目的語が省略されることが頻繁に観察される。これら主題の兼務による省略も含め、照応的な省略は日本語ではかなり広く行われると考えられ、特に語彙的な制限もないものと思われる。つまり、すでに導入済みの要素が目的語の場合、動詞によって省略できるものとそうでないものがあるというような単語間の差はない、または大変少ないと考えられる。

ただ、では「文脈から予測可能なものがすべて省略可能か」と言ったら、そう言い切ることはやはり難しいようである。

26) ?暗くなったね。つけようか。

27) 暗くなったね。電気つけようか。

母語話者の感覚として、例文 26 よりも例文 27の方がすわりが良いと感じるのではないだろうか。ただ、これらのことは実際の発話データを一定量客観的に分析してから

でなければ結論を引き出すことは難しく、今後の課題である。

7.2.日本語における非照応的省略

では、非照応的な省略はどうか。会話コーパスの分析で示されたとおり、日本語においては非照応的省略には様々な制限があり、照応的省略ほど広く自由におこなわれることはできないと考えられる。照応的な省略とは対照的に語彙的な制限も強く、語彙の性質により非照応的な省略の成立条件も異なるようである。

まずは、かなり広く非照応的省略が行えると思われる語彙から見て行く。文脈に依存しない省略、つまり最初に言及した「談話の初期状態」で目的語が省略できるものとして、「歌う、踊る、楽しむ、勉強する」と言ったような目的語がなくても単独で使用できる他動詞がある。また「酒を飲む」という意味での「飲む」は非常に語彙化が進み、かなり自由に省略が行える。語彙化が進むと、辞書でも独立した用法として定義されていく。これらの省略に関し制限が非常に少ない語彙の他に、ある種の動詞は、「～こと」などといった一定の構文条件を満たした上で省略が可能になる。ここで省略される要素は、前述の Lemaréchal が指摘するように総称的な要素である。日本語ではこのような省略が可能で動詞の範囲はかなり狭く、多くの動詞は「ものを書くこと」「人を褒めるの」といったように総称的な上位語を明示しなければならない。

次に共起表現に依存する省略というものが観察される。これは、目的語以外の補足語が明示されることで自ずと目的語が決定し省略が可能となるものを指す。ここで省略される要素は、前述の Harris の適応語になる。

28) あの赤ちゃんは、よく飲む。

29) 大企業は、切る時は切る。

「赤ちゃんが飲むと言えばミルク」(例文 28)「大企業が切ると言えば人材」(例文 29)といったような連想ゲームで出て来るような要素が適応語であると考えられる。これは、「赤ちゃん」「飲む」という要素がそれぞれ持つ共起成分の集合の積集合から「ミルク」が導きだされると考えられる。語彙化が進むというのは、「飲む」という単一要素で「酒／アルコール」が導きだせるようになることであり、そうなる就先ほど言及したように省略の可能性が広がると考えられる。

最後に難しいケースとして、文脈により自動詞用法が生まれる他動詞が挙げられる。これらは適当な目的語を限定することが難しく、何かを補うと不自然、あるいは非文法的になってしまう用法である。

30) 今年の橋本は確かに打った。

31) こいつだ、と思ったら、とにかく押す。

例文 30 に「ボール」という目的語を入れれば非文法的な文になり、「ホームラン、安打」という語を補えば意味が変わってしまう。これらは、ある種の意味変化が起こっ

たとえられるが、これらのケースを省略という現象の中でどのように位置づけるかということはさらに先行研究などもふまえて考えて行かなければならない。

ここに挙げた非照応的な目的語の省略に関する分類は、まだまだ仮説レベルであり、これから実際のデータを数多く分析し、検証を進めて行かなければならないと考える。

8. フランス人学習者の誤用例

以下に挙げる例は実際にプロバンス大学の学生に見られた間違いの例である。フランス人学習者の間違いには大きく分けて2つのタイプがある。

まず、照応的な名詞句を代名詞化によって明示しすぎてしまう傾向がある。

32) たけしさんがいたら、ここに彼を連れてきてください。(L1 会話)

フランス語の照応的な名詞句はまず代名詞で受けなおすという代名詞化への志向性を日本語に持ち込んでしまうために起こる間違いであると考えられる。

次に、非照応的な目的語を省略しすぎる傾向がある。

33) ときどき、家族に書きます。(L1 会話)

34) 週末は何をしましたか。— 読みました。(L1 会話)

35) 今日は、買いました。(L1 会話)

36) 車の中で吸ってはいけません。(L1 作文)

37) 日本人は地下鉄や通りでは食べません。(L2 作文)

38) 兄は作家ですが、このごろ書いてません。(L1 作文)

このような例ではコンテキストや状況に応じた「適応語」を補うことができないために起こる間違いが見られる。

9. 対策の一提案

フランス人学習者の間違いは、照応的な名詞句は代名詞化し、非照応的な目的語を省略することを好むフランス語の傾向をそのまま日本語に持ち込んでしまっているためではないかと考えることができる。したがって、以下のような点に留意して教える必要がある。

- a. 非照応的な不定の目的語を補うためには、与えられた文化的コンテキストの中で、主語・動詞の組み合わせに最も共起する可能性の高い目的語があることに注意を促す。また、一種、慣用語化したものについては、動詞から切り離さないで語彙的知識として教え込む。
- b. 照応的な目的語に関しては、一度現れたものはできるだけ繰り返さない、代名詞化させないように注意を促す。

10. 結論

本稿で明らかになったことは、以下の3点である。

- a. 日本語とフランス語では、照応的な省略と非照応的な省略の分布が完全に逆転している。
- b. フランス人日本語学習者には、照応的な省略を代名詞化しすぎる、あるいは非照応的な省略を多用しすぎる傾向が見られる。
- c. 教育の現場では、談話の中における主語＋動詞＋目的語の共起関係に注意を促し、典型的な語の組み合わせのパターンを教える必要がある。

また、今後の問題点としては、

- a. 省略現象に基づく動詞分類等の理論的研究を進める必要がある。
- b. 辞書等の言語資料の充実、記述の質の向上しなくてはならない。
- c. それらの言語資料の日本語教育への具体的な応用法を考えなくてはならない。

といった問題点がまだ残されている。これらの点については再び稿を改めて扱いたいと思う。

参考文献

- 田窪行則 (1989) 「名詞句のモダリティ」 『日本語のモダリティ』, くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味』 1, くろしお出版.
- 仁田他、日本語記述文法研究会編 (2009) 『現代日本語文法』 2, くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則(1992) 『基礎日本語文法』, くろしお出版.
- 三上章 (1953) 『現代語法序説』, 刀江書院.
- AKIHIRO H. (2004) *Contribution à l'étude de la valence verbale en français contemporain, la non-réalisation du complément d'objet direct*, Thèse de doctorat soutenu à l'Ecole Pratique des Hautes Etudes, Paris.
- BLANCHE-BENVENISTE, C. et al. (1984) *Pronom et syntaxe, l'approche pronominale et son application au français*, Paris SELAF
- BLINKENBERG, A. (1960) *Le problème de la transitivité en français moderne, Essai syntactico-sémantique*, Copenhagen, Munksgaard.
- CREISSELS, D. (2006) *Syntaxe générale, une introduction typologique 2, la phrase*, Paris, Lavoisier.
- HARRIS, Z.S. (1970) *Transformational theory, Papers in structural and transformational linguistics, vol.1*, 533-577.
- HOPPER, P. et S. Thompson (1980) *Transitivity in grammar and discourse*, Language vol.56, n°2, 62-118.

De l'omission des compléments d'objet

Application à l'enseignement du japonais

Hisae Akihiro[†] Yayoi Nakamura-Delloye[‡]

[†] Université de Provence [‡] ALPAGE, INRIA-Rocquencourt

Keywords / Mots clefs : omissions anaphorique et non anaphorique, études contrastives basées sur le corpus, erreurs relatives à l'omission

Abstract / Résumé

Les phénomènes traités dans le domaine de la linguistique japonaise sous le terme d'omission (*shōryaku*) constituent un problème complexe relevant de différents niveaux d'analyse linguistique tels que le niveau lexical, syntaxique ou discursif. Un grand nombre d'études traitant cette question de divers aspects ont été proposées jusqu'alors. Dans la présente communication, nous nous focalisons sur l'omission d'un type particulier des constituants, les compléments d'objet, et nous en proposons une étude contrastive français-japonais. Nous présenterons le concept de « *zeroing* » proposé par Harris afin de décrire ce phénomène d'omission du point de vue de la linguistique générale. De plus, nous tenterons de montrer par l'analyse des exemples du français et du japonais, que ces phénomènes apparaissent de manières fort différentes selon les langues, comme Lemaréchal ou Cressel l'ont signalé. À cet effet, nous mettrons tout d'abord en lumière les différences et les points communs entre ces deux langues. Enfin, nous essaierons également d'appliquer les réflexions obtenues par ces études contrastives aux analyses des erreurs commises par les apprenants. En partant de l'hypothèse que ces erreurs proviennent des influences de la langue maternelle, nous tenterons de cerner celles-ci.